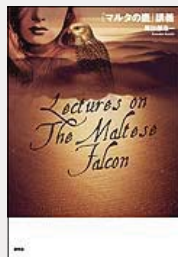


諏訪部浩一 著

『『マルタの鷹』講義』



文学研究の道を志した者が抱く野心は、大きく分けて二つある。一つは、文学史を書くことである。そしてもう一つは、一冊の文学作品だけを取り上げて、それをまるごと論じ尽くすことである。極大と極小の両極端に分かれてはいても、この両者はいずれも全体への欲望という点で一致する。違いは、文学全体を志向するか、作品全体を志向するかという方向性だけだ。もちろん、そのような全体への欲望が、小さな一個人にはかなわぬ高望みであることは言うまでもない。そこで文学研究者は、現実的な妥協の道として、全体をひとまず細分化し、個々のテーマという断片を多数の論文に書く作戦を選ぶ。とは言え、最初から敗北を覚悟しつつも全体を夢見るロマンティックな心性をいささかなりとも持ち合わせなくては、そもそも文学研究者の名に値しないだろう。

気鋭のフォークナー研究者として知られる諏訪部浩一の

『『マルタの鷹』講義』は、その第二の野心に貫かれている。その目的は、「小説『マルタの鷹』を精読することである」と冒頭で著者は宣言する。「精読」と言っても、その内実は人によってさまざまなのだが、ここで諏訪部の言う「精読」とは、「普通に読む」ことであり、それは「未知の語は辞書で調べ、先行研究を可能な限り読むといった、外国文学研究者として極めて『普通』の手続きを重ねていく過程」のことである。「普通に読む」ことがけっして普通ではない現在の文学研究にあつては、こうした愚直な態度はかえって新鮮に映る。

全体で二十章ある『マルタの鷹』の構成に倣って、本書では一回分の講義がほぼ一章にあてられる。『マルタの鷹』がもともと『ブラック・マスク』誌に連載されていたという形式を踏襲して、本書の原型も『Web 英語青年』に連載された。登場人物たちのふるまいの一挙一動が、そして小説のふるまいの一挙一動が、俎上に載せられて些細に検討される。小説研究者とは、つまるところ探偵の謂である。小説という「事件」を目の前にして、あらゆる手がかりを見逃さずすべてを解読したいという探偵的な欲望に突き動かされて、さまざまな描写の「意味」が、小説内世界のレベルで、そして小説執筆やアメリカ文学史、ジャンル論といったメタレベルで考察される。その手つきは、ハードボイルド探偵のように、どこまでも愚直かつ禁欲的である。

すべてを解読したい探偵にとって、小説の中心となる謎の宝「マルタの鷹」を「ファリック・シンボル」と読むことは避けられない事態かもしれない。もちろんそれだけではなく、著者は「男らしさ」に関するジェンダー・イデオロギーの問題を十分に論じていて、その両者が接続しているところが本書の手厚

さなのだが、やはりロマンティックな幻想を「マルタの鷹」という一つの物体に封じ込んだハメットの手際には勝てないような気がする。批評とは所詮小説そのものに敗北する運命なのかなと思わせなくもない。しかし、わたしにとって本書の最大の読みどころは、『マルタの鷹』を「探偵小説」と「恋愛小説」と「冒険小説」が格闘する場として読み、それをスペードの煩悶、ハメットの腐心、そして読者の期待が交わる重層的な場へと展開してみせた、第十九章をめぐる議論だった。そこに至って、モダニズム文学の問題意識を持った大衆小説家としてのハメットの姿が、痛々しいまでにくっきりと浮かび上がってくる。そしてそれと同時に、探偵スペードと作者ハメットのイメージが、読み手として、そして書き手としての諏訪部に重なって見えてくる。著者が『マルタの鷹』に出会い、そしてこの講義を書いてしまったのは、ブリジッドがスペードの探偵事務所にやってきたように、逃れられない宿命ではなかったかとまで思わせる。最良の批評とはそうしたものではないか。

ハードボイルド探偵小説を読む読者には自明のことだろうが、著者がどこまでも愚直かつ禁欲的であろうと努めているのは、要するに泣きたいからである。ハードボイルド探偵は、心の中を見せまいと、鎧兜を身につける。しかしそれでも、ロマンティックな心性は隠しようがない。本書でも、各講義の端々に、ハードボイルド的な決め台詞が顔をのぞかせる。本書の読者は、講義の最終盤が近づくにつれて、もうここまで愚直を貫き通したのだから、好きなだけ泣いてもいいのではないかと期待する。諏訪部はその読者の期待を裏切ることなく、文学研究者の鎧兜を脱ぎ捨てて、最後の講義で思い切り泣いてみせる。それはまさしく「ロマンティック・リアリスト」のふ

るまいなのである。(研究社、2012年3月、四六判 382頁、2,800円)

——若島 正 (京都大学教授)